D―10　科学・技術・技術学
――家政学試論（その２）――

青山学院女子短大　深谷　浩

1. 前報（'63年度総会発表）においては，「家政学はどのような科学であるか」という問題への接近をはかることを意図しながら，「科学論」の検討・吟味を行ない，演者の見解を表明した。その際，「技術」をどのように考え，「技術学」をどのように位置づけ，その方法をどのように評価するかということの重要さに言及したが，十分に掘り下げることができなかったので，本報では，この点を中心として考察を進めたい。

2. 3. 「技術」は，狭義には生産技術の意味に用いられるが，広義にはなんらかの文化的・社会的目的を達成するための実践の方法を指す概念であると考えてよい。近代技術においては，このような実践は，社会的な客観性・普遍妥当性の上に立って行なわれ，あるいは少なくとも行なわれるべきであると考えられているので，このような客観性・普遍性を追及する「技術学」の成立が可能となる。ただし，この客観性・普遍妥当性には「社会的な」という価値関係的な形容が付せられているから，純粋に没価値的な客観性を追及する「純粋科学」とは，その性格を異にし，したがってその研究方法を異にする。この視点に立って，家政学の性格・方法について考察する。